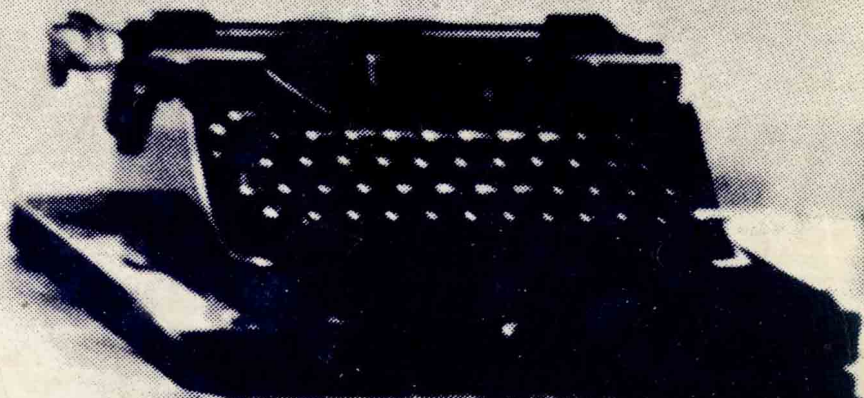


フォークナー

現代史を生きる

赤祖父哲二

英米文学作家論叢書



オークナー

現代史を生きる
赤祖父哲二

冬樹社

ILLIAM FAULKNER

著者略歴

赤祖父哲二（あかそふ てつじ）

1932年生まれ 東京教育大学文学部卒業 現在、筑波大学文芸言語学系助教授 著訳書、『言葉と風土』（開文社）『ロゴスのゆくえ』（英潮社）『批評論序説』（冬樹社）アーヴィング・ハウ『ウィリアム・フォークナー』（冬樹社） その他

英米文学作家論叢書 20

ウィリアム・フォークナー

昭和52年11月24日 初版第1刷発行

著者 赤祖父哲二

発行者 高橋直良

発行所 冬樹社

東京都千代田区神田神保町2-18

郵便番号101 振替 東京8-7757

電話 東京 03(264)0346(代表)

印刷 稲葉印刷株式会社

製本 株式会社 美成社

装幀者 三嶋典東

©Tetsuji Akasofu 1977 0098-10261-5190

本書の内容の一部あるいは全部を、無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作権者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。

目次

一	現代史を生きる	5
二	血統の宿命	44
三	呪い報復する大地	70
四	ほんとうの現在とは	116
五	さまざまな遠近法	145
六	書くことの象徴学	181
	あとがき	207

フ	フォークナー略年譜……………	209
フ	フォークナー主要文献……………	

ウ
イ
リ
ア
ム
・
フ
ォ
ー
ク
ナ
ー

一 現代史を生きる

1

ウィリアム・フォークナーの生涯——一八九七年（明治三十年）から一九六二年（昭和三七年）の六五年間——は、史上に類例をみないほどに、衝撃的な事件を地上に発生させた時期であった。彼の死は、今から十五年ほど前にすぎず、私たちは新しい燃えさかりの可能性をひめた、その余燼のなかにいる。

歴史年表を見るまでもない。第一次世界大戦、世界経済大恐慌、ロシア革命、ファシズムの台頭、ユダヤ人大虐殺、第二次世界大戦、航空機やロケットや原子力産業の発展、広島と長崎における多量爆死などに至る驚異的な技術革新と武器の発達、アジアとアフリカにおける植民地の独立……。

事件だけをとりあげると、一つの成果をあげるのに支払われた犠牲の巨大さに眼を奪われ暗澹

たる氣持に襲われるが、歴史はきわめてゆっくりながら、ある一つの方向に確実に歩んで行きつつあるように見える。地上における寡頭支配の終焉と人權の伸長である。しかし同時に、人口の爆発的增加、自然破壊、資源の枯渇、食糧危機……が迫る。

一世代を約三十年とすれば、フォークナーは現代の若者にとって、一つとんで前の世代に属するが、主として彼は二十世紀前半に、現代の若者はその後半に、それぞれ生をうけたという違いにすぎない（こう書く私自身は、両世代の中間に位置するがゆえに、両者をつなぐ役目があるといえる）。

右にあげた歴史的な大事件は、ほぼ世紀の前半に出そろっており、後半はその延長線上にあって、それらの解決のメドをつけるための五十年となりそうだとも考えられる。はたして、どこまで、そのメドがつけられ、何を二一世紀まで持ちこすのだろうか。

ともかく、私たちは前の世代の歩みをふり返り、自己の位置を定めなくてはならない。フォーナーに近い生まれの人びとをあげてみよう。

ドリゴール（一八九〇—一九七〇）、毛沢東（一八九三—一九七六）、エドマンド・ウィルソン（一八九五—一九七二）、ジョン・ドスリパス（一八九六—一九七〇）、アーネスト・ヘミングウェイ（一八九九—一九六一）、川端康成（一八九九—一九七二）、アンドレ・マルロー（一九〇一—一九七六）、サルトル（一九〇五—）などが並ぶ（このほか、ピカソ（一八八一—一九七三）、魯迅（一八八一—一九三六）、ジェイムズ・ジョイス（一八八二—一九四一）、T・S・エリオット（一八八八—一九六五））。

十九世紀の終幕に生まれて、この五十年——古典古代の崩壊期か、宗教改革の血なま臭い時期

1 現代史を生きる

に匹敵する波乱の五十年——を生き抜いてきた人は、読者のすぐ身近かにはないだろうか。一八九七年は明治三十年であり、島崎藤村の『若菜集』出版の年で、若々しい息吹きが感じられるが、すぐ日露戦争、さらに第一次大戦、大正デモクラシー、社会主義運動、中国侵略、日米戦争……、あげくの果て、最近とみに老人の生きにくい世に出食わしている。あまりにも目まぐるしい変転が、時代に翻弄されて味わった喜怒哀楽を呑みこんでしまっではないか。

政治面から顔をそむけ、美術史をひもといてみると、前世紀末のあざやかな色彩の乱舞から、モダン・アートの無気味な世界までわずか二、三十年の変化は、あまりにも急激に見える。ダリの〈内乱の予感〉(一九三六)は、赤ちゃけた大地の上に、人間の手と足と胴と首がちぐはぐにながって立ち、大空に向かって苦悶ののたうちを見せている。私には、半世紀のすべてが、この一枚の絵に集約されていると思えるほどである。

ここに、一九七〇年に七十歳をすぎたばかりの一人の老人がいる。一九六九年には、人類最初の月旅行が成功したこと、この老人はフォークナーとほとんど同年輩であること、この二点を頭に入れておく必要がある。

ポーランド生まれのユダヤ系アメリカ人。ナチの侵略によって、妻を含めた多くの同胞とともに、みずから掘らされた大きな穴の前で銃殺されるが、彼だけはまったく奇跡的に死体の山の下からはい出し、生命をひろう。銃殺の直前に、ドイツ兵によってシャベルで顔をなぐられ、片目は失明。しかし、その後はパルチザンの一員として、雪の上でドイツの落伍兵を射殺する。「殺さないでくれ、おれには子供がいる」と哀願するその男の頭に弾丸が当り、脳味噌が飛び出す。

その死体から、シャツや靴下やパンを奪う。だいたい彼自身が、ぼろ切れと紙を衣服がわりにして、人間だといえる状態になかったのだから、顔や喉の筋肉をひくひくさせて哀訴する敵兵に、憐憫の情など感じるわけはなかった。

戦争末期には、彼はポーランド人による、ユダヤ人虐殺から逃れるため、沼地に身を横たえたり、墓地に何週間もひそむことで、ようやく死地から脱出する。ある限度を越えてまで生きるよりも、死を選んだほうが合理的であり、かつ高貴だといえる極限状況を、彼は乗り切ってきたのである。

今はニューヨーク市の狂騒のなかに住み、とくにシオニストでもないのに中東戦争をジャーナリストとして観戦するはめになったり、大学で講演をたのまれ、老人の寝言など聞くなど絶叫する若者から追いつけられ出されたりしている。

その名は、ソール・ペロウ描くところのサムラー氏である。

平等は何を意味したか。万人が友人であり兄弟であることを意味したか。いや、すべてがエリートのものだということの意味した。殺戮は古代の特権であった。このゆえに革命は流血に突入した。ギロチンはどうだったか。恐怖政治はどうだったか。それは、ただの始まりであり、たいしたことではなかった。ナポレオンがやってきた。彼はヨーロッパをすっかり血で洗ったギャングだった。スターリンがやってきた。彼にとって、権力のほんとうに偉大な賞金は、妨害されずに殺人を楽しむことだった。(……) 社会の中間層にとって、エリートは殺人の能力に

1 現代史を生きる

よってみずからの証しを立てなくてはならない。そのような人びとにとって、聖者とは、心のもっとも奥に燃えるような犯罪のよじれという資格を所有する者なのだ、と理解されなくてはならなかった。斧によって自己をためし、老婆たちの頭蓋を叩きつぶす超人。神の祭壇でわが子イサクの喉を切ることのできる信仰の騎士。そして、今は、殺人によって自己の主体性を取り戻したり確立したりすれば、誰とも、もっとも偉大な者たちとも等しくなれるという考えが起こった。すぐれた人間なら殺戮の方法を知っていて、古代の貴族に似た者なのだ。これにたいして、中産階級は独自の名誉の基準を形成しなかったので、彼らは殺し屋どもの魅力に抵抗できなかった。みずからの精神生活の創造に失敗し、物質的な拡大のためにあらゆるものを投資し、災難に直面した。そして、世界はまた魔術から解放され、大気から追放された精霊や悪魔が内部にとり入れられる。理性が家屋を掃除し、装飾をしたけれど、最近の事態ははじめの状態より悪化したかもしれない。では、こうして、人は月に何を運び出そうというのか。

このような、異様であるが、鋭く人類の歴史の一面を照らし出す感慨を抱くサムラー氏にとって、七十年の生涯で見たのは、悪魔的な世界大戦という巨大な殺人ドラマばかりではなかった。あの近代の演出者となった啓蒙思想とフランス大革命の結果——自由、平等、博愛、教育の普及、男女平等、普通選挙権、社会保障、児童の権利、人種差別の撤廃、性の解放、教会や家族のきずな、の弱体化などなど。まるで気違いじみた大行進の連続だった。

こうして、サムラー氏は理性と理性の職人たる知識人に大きな疑いをもち、それらと自己を切

り離そうとする。知識人などは、文明からもっとも気にいられながら、いったん文明が衰弱をはじめると、たちまち文明を攻撃する説明狂にすぎないのだと。

プロレタリア革命、不条理、リビドーなどという大義名分をもち出して、飽くことなき要求を文明に突きつけた知識人と自分はちがうのだ、とサムラー氏は考へる。ここで当てつけられた知識人の名は、すぐ思い浮かぶはずである——マルクス、カミュ、フロイトと。また彼は、文明の進歩によって困いこまれた自然状態を昔にかえすためか、原初の野蛮さや犖猛さの役割を引き受ける人間が乱舞するなかで、終末論のラッパを吹きならす人間とも、自分はちがうのだと思う。

ニューヨークに住んでいるのだから、ソーロウのように森のなかで瞑想にふけるわけにはいかない。満員電車のなかで、紳士然とした黒人スリと視線を合わせたばかりに、その男にアバートまで跡をつけられ、巨大なその性器を見せつけられるだけで、何事もしないし、できようがない。こうして、氣違ひじみたコミットをせず、しかし何事からも逃避しない、つまり積極的、宙ぶらりんであり続けようとする人間が、サムラー氏なのである。そういう緊張感を持続できるようになつたのは、やはり七十年の体験のせいだとしか考へられないような存在である。

たいていの人間は、半世紀をこえる生涯の果てには、何らかの境地に到達する。私たちの主人公フォークナーはどうであつたらうか。第一次大戦に出会つた若者として作家の仕事にとりかかり、廃人となつた若い将校を『兵士の報酬』(一九二六)で描くことから始めて、途中は南北戦争の傷痕にのめりこみ、晩年になつては、また第一次大戦に題材を求めて『寓話』(一九五四)を書くなど、終生にわたつて戦争から離れることはできなかった。とくに終わり近くになると、ノ

ーベル賞受賞演説(一九五〇)にあるような予言者らしい風貌をあらわにすることとなる。たしかに、この点では、サムラー氏とはちがう。しかし、説明と告発が唯一の業であるかのような知識人とは、フォークナーも明らかに一線を画しており、この面ではサムラー氏と共通する。

それは、彼が文明の極アメリカ内部の、いわゆる後進地帯に立脚し、その矛盾を一身に浴び、かつ引き受けながら、故郷から十分に理解されなかったことによくあらわれている。たとえば、黒人問題について態度の屈折したところを突かれ、「泣きべそウィリー」と、地元の新聞から笑われもした。こういう点では、さまよえる民族の息子で宙ぶらりんの男サムラー氏に近づく。

2

では、フォークナーにとって生涯の大事件となった戦争——ヨーロッパ文明の進路にとって大きな曲がり角となった第一次大戦——を彼はどのように捉え、どのように自己の文学世界のなかで発酵させたであろうか。これは、はるかに残酷にして大規模な第二次大戦に出会った私たちにとって、絶対に見落としてはならない問題である。

フォークナー自身は、名前の綴りまで変え(Faulknerの「k」をつけ加えた)、イギリス人になりすますため、イギリス英語の発音練習までしてカナダ空軍に志願したという。直接の動機は、失恋の傷を癒すためであったにしろ、彼が当時の圧倒的多数の若者と同じく、中世の騎士よろしくロマン主義的な心情や正義のための聖戦意識に酔って、一日も早く大西洋を渡ろうとしたのは

確かである。

しかし、大戦は四年ほどですみ、たちまち世の雰囲気は一変する。帰還兵を待ち受けていたのは、相も変わらず功利に走る社会であり、昨日ふった理想の旗などけろっと忘れる現実主義の姿であった。その結果、心の空洞が広がり、歴史に欺かれたという無念がたまる。

生死をかけた酸鼻きわまる戦いは、いったい何のためだったのか。『兵士の報酬』の中心人物メアン空軍中尉は、空中戦で顔に恐ろしい傷を受けたばかりか、頭部の負傷のため、すでに廃人に近く、何も語ろうとはしない。偶然、列車のなかで、この青年の帰還に出食わして以来、メアンの故郷ジョージア州まで付きそい役を買って出て、とうとう滞在することになってしまった若く美しい戦争未亡人マーガレット・パワーズも、多くを語ろうとはしない。ただ、彼女はニューヨークの赤十字で働き兵士たちと交わっているうちに、戦場に行く直前のパワーズという若い男と知り合い、意気投合してたちまち結婚し、またすぐ夫の戦死によって寡婦となったいきさつを、ふともらすのみである。

どんなだったか、おわかりでしょう。兵士たちはみな戦場で華々しく死ぬことを、ほんとうは信じていないのに、またそれがどんなことか、ろくに知りもせず、語り合っていたのだわ。そのうえ、女たちも、まるでインフルエンザにかかったみたいなのに、今日何をして、明日になれば何の意味もないし、事実、明日なんかまったくない、という考えにとりつかれていたみたいですよ。

夫パウーズ中尉は、部隊が塹壕に待機中、毒ガス来襲におびえる狂った部下の兵士によって射殺される。ある少年が一人の帰還兵に聞く、「戦争で何したの。人を殺したかい」。少年はその元兵士から、黄色の底知れぬ蛇のような眼でにらみつけられ、悪寒をおぼえる。「ポビー、早く行きなさい。ほんとうの兵士は、自分のことなど話したがらないってことがわからないの」、と少年は姉に注意される。

戦死のほすの婚約者メアンが帰ってきたので、新しい恋人との間で動揺する若い娘セシリー・ソーンダーズ、婚約者としての義務を説くその父親、廃人と結婚すれば娘の将来が真暗だと恐れるその母親、「戦争の英雄帰る」と持ちあげておきながら、メアンとマーガレットの間を疑いの眼で見る町の人びと、息子の回復のためセシリーの愛を期待するメアンの父親である牧師、——この作品は、こういった故郷の人びとを描くのに大部分のページを費やしている。

彼らは、戦争そのものにほとんど何の衝撃も感じていないかのようである。大西洋の彼方で若者がいくらか死んだだけであったアメリカでは、無理もないとは思えるが、それではあまりにも空しい。一人マーガレットのみ深い苦悩のあげく、セシリーとエミー（メアンの以前の恋人）にメアンと結婚するよう説得して失敗すると、死直前のメアンと結婚し、その葬式に参列し、ふたたび未亡人となり、そのあげく黙って町を去ってゆく。

かくて、トルストイの『戦争と平和』（二八六九）にまつわる栄光は、永遠に去ってしまったかに見える。その時、戦争は荒廃をもたらしたにもかかわらず、果敢な抵抗をみせた民族の底力を改めて確認させ、民族の将来について光を投げかけてくれた。しかし、そのような効果は、もは

や期待できそうにない。

「現世紀の初葉におけるヨーロッパ動乱の根本的かつ本質的意義は、ヨーロッパ諸国民の大集団の、はじめは西から東へ、ついで東から西への軍事行動である」(中村白葉訳)と堂々たる記述を千ペーシ以上もの大叙事詩のなかに書きつけたトルストイの時代とくらべると、戦争はあまりにも大規模な殺戮のあげく、それを生み出した土台さえ崩しはじめた。

それから百年ばかり後のロシアでは、シヨロホフの『静かなるドン』(一九三二一六〇)が描くように、一介のコサック農民に波乱に充ちた流転を与えたが、それとともに、まだまだ悠々たる大河の詩を響かせることができた(もっとも完成まで三十年近くかかり、その間に政治の悲劇が反映していないわけではないが)。

同じ時期、西方では『西部戦線異常なし』(一九二九)が無名戦士の運命に光を当て、反戦や厭戦の感情を大きくゆさぶり始めた。大衆社会状況を反映して、それが大ベストセラーとなったのも見逃せない。また、いうまでもなく、ヘミングウェイの『日はまた昇る』(一九二六)と『武器よさらば』(一九二九)が驚くほどの読者を獲得したことは、戦後の虚脱と幻滅が、戦場にまつわるロマンを圧倒し、吹きとばしてしまったことを物語る。

ヘミングウェイの短編『異国にて』は、リハビリテイションのため病院に通う戦傷者たちの様子が淡々と描かれている。いわゆる名譽の負傷で勲章を与えられていたのだが、みな胸には寒寒とした風が吹くだけで、